

第7-3号

耕人

『耕人塾』

塾長 木村 民男

平成30年7月14日(土)

「耕人塾」の名称由来について

今回は、なぜ『耕人塾』という名称にしたのかを詳しく説明したいと思います。私は38年間の教師生活の中で、子供たちや保護者、先輩・同僚の先生方や地域の方から多くのことを学ばせていただき、いつか恩返しをしなければならぬと思っていました。定年退職後、東松島市の教育長を1期努めさせていただき、石巻専修大学に勤めるようになったことを契機に、人材を育成することによって地域貢献しようと決意し、名称については兼ねて温めていた『耕人』という名称を使うことにしました。その名称の由来については次のような理由があります。

私は小学校3年生から剣道を始めて50年以上になります。辛いときや苦しいときもありましたが、高校・大学と剣道部に所属し、中学校の教員になってからは剣道部の顧問として多くの出会いに恵まれました。昭和58年私が35歳の時、剣道の恩師である武山松五郎先生(剣道八段、故人)が剣道範士(剣道の最高位)を拝受した折りに、武山先生の恩師であり剣道範士九段(当時の最高峰)の小川忠太郎先生(故人)が祝賀会の来賓として来石しました。小川先生は80歳を超えていたのですが、湯殿山道場で稽古をいただいたときには一本も触れませんでした。石巻グランドホテルでの講演で小川先生は剣道指導で大切なこととして「本質を失わないこと」「平易に教えること」の二つを話されました。この言葉は今でも私の指針になっています。小川先生の号が「刀耕(刀で世を耕す)」です。小川先生の意志を継いだ武山先生は「剣松館武山道場」の師範として、剣道を通じて多くの子供たちを育ててきました。武山先生は「剣道耕人」という言葉を好んで揮毫し、「剣道を持って人を耕す」を実践された人です。80歳過ぎてからがんを患い、入院先から何度かお手紙をいただいたことがあります。最後の手紙に「木村先生、子供たちの能力は無限です。教育者として子供の心を耕し、この地域をそして日本を担う立派な人材を育成してください」とありました。その言葉に感動したことを今でも鮮明に覚えています。

そのような経緯から、小川先生と武山先生の「耕」をいただき、『耕人塾』という名称を使うことにしました。「人を耕す」ということは他の人を耕すだけではなく、自分自身をも耕すことだと思っています。世の中には種々のハンディを背負いながら、活躍している人が沢山います。見えない、聞こえない、話せない、の三重苦を克服し、福祉活動に生涯を捧げたヘレン・ケラーは自らを耕した人の一人です。また、花の詩画集を出版している星野富弘さん(私と同年齢)は、念願の中学校の体育教師になって2ヶ月後にクラブ活動の指導中に頸椎損傷の重傷を負い、手足の自由を失いました。しかし、その後の努力で口に絵筆をくわえて詩や絵を描き、多くの人に感動を与えています。前号の「サムシング・グレート」では生命の奇跡を書きましたが、人間には一つのことだめでも潜在する無限の能力が与えられているのだと思います。自分自身を耕し、他の人も耕して地域社会に貢献したいという思いで『耕人塾』という名称にしたのです。

笑顔であいさつ心温かく

河北新報(H30.7.5月)「声の交差点」に掲載された丸森町の目黒羽那さん(11歳)の文章を紹介します。「わたしの学校では児童会で「I・D・D・A—いつでも・どこでも・だれにでも・あいさつ」というスローガンを掲げ、あいさつ運動に取り組んでいます。(略)下校時に畑で忙しく仕事をしている地域の方にあいさつをしたところ「こんにちは、おかえり」と返してもらい、心が温かくなった経験があります。(略)あいさつが苦手な人もいるかも知れませんが、いつもより明るい声で言ってみると、相手は笑顔で返してくれるに違いありません。毎日の生活が一段と楽しくなります。(以下略)」あいさつの魅力を体験から述べていますね。『耕人塾』でもあいさつ運動に取り組んでいます。あなたはどんな+1(プラスワン)を付けてあいさつをしますか？